

## 日暮里で

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 珉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008206">https://doi.org/10.14945/00008206</a>

## 日暮里で

南 珉

私が王族の後裔に会ったのは、民国初期の中国浙江省の紹興でもなく、植民地期の京城（ソウル）でもなく、ごく最近の東京の日暮里であった。王族の後裔は姓を朴と言っていたが、正確な名前はよく分からない。苗字の朴さえ、じつは本当の苗字なのかどうか定かでないが、本人が朴を名乗り、周りがパク先生と言っていたので、ここでは仮にパク先生と呼ぶことにする。しかし、姓名が定かでなくとも、彼が韓国人であることはほぼ間違いない。もちろんこれも真偽のほどは定かでないが、本人がみずから自分は王族の後裔であると言っていたことも事実である。

私がパク先生に出会って、民国初期の浙江省紹興を思い浮かべたのは、世界文学に少しでも興味がある人なら誰もが推測できると思われるが、かの有名な「阿Q」を思い出したからである。場所が日暮里ということもそうした連想を強めた。日本ではあまり知られていないが、魯迅には「日暮道遠、人間何世」という中国の知識人なら誰もが知っている日暮里に関連する有名な詩句があり、それで魯迅と「阿Q」を思い出したからである。

もう一つ植民地期の京城を思い出したのは、他でもなく、私が韓国人だからである。これも日本ではほとんど知られていないが、植民地期の京城に彗星のように現れた金某という文学評論家があり、パク先生を見たときに、会ったこともないその金某という評論家が思い浮かんだからである。これは私が大学時に少し文学に興味があったからの連想ではなく、韓国で普通に教育を受けている人なら誰もが連想するものである。邪悪の根源としての日本があり、その手先の傀儡として滑稽を演じる金某という文学者がいるというような図式である。宇宙万物は正と邪で分けられ、つねに正なるものは「われ」のもの、邪なるものは他人のものということになる。たとえば、「われ」の恋は一途な純愛になるが、それが他人のものとなると穢れた不倫ということになる。さらにたとえば、災害などで「われ」が寄付をすれば善意の高潔な発露になるが、それを他

人が行えば売名行為による利益の誘導ということになりかねない。もちろんその中身が変わりがあるわけではない。こうした論理で言うと、金某は明らかに「われ」ではない他人に属し、邪そのものとなる。草豚という奇妙な筆名から「植民地期のブタ」とも罵られているが、それは当然である。とても分かりやすい論理である。

さて、パク先生の話に戻るが、私がパク先生に会ったのは、たった一回限りであった。それも昼の公な場所ではなく、夕暮れの日暮里の路地裏にある小さなスナックであった。たまたま入ったバロンという名のスナックの内部は、その類の店がもつ特有の薄暗さで、顔の特徴的な部分が過度に強調されるので、もしも昼間に再度パク先生に会ったとしても、彼の顔を正確に見分けられるかどうかは自信がない。日が暮れたばかりの宵なのに、すでに酒で顔が赤くなっていたのも、彼の素面の想像を難しくする。印象に残るのは、白髪が多い髪をオールバックにし、てかてか光る顔で鼻だけが不似合に大きかったことであるが、それ以上に特徴的なことは、彼の日本語が非常に癖のあるもので、しかも饒舌であったことである。また彼がスナックバロンの常連であることもほぼ間違いない。

ここで私がスナックバロンに行った経緯を簡単に述べておこう。まず私が日本に来た理由から始めよう。

私は韓国の中堅女性雑誌『女性社会』のいちおう記者という身分である。中堅と言っても社員は八名ばかりで、取材と原稿の執筆に加え、特集記事と企画ものを担当し、さらに原稿の依頼に赴いたり、忙しい時には経理の雑務も手伝ったりする。一人で何役もこなさないと立ち行けない会社である。もともと女性関連の社会問題を主に扱ってきたが、販売部数は伸びず、やむなく記事はキャンダルものを中心に、たまに企画される特集ものも社会問題を大枠で捉えながら、きわどい性的扇情性を強く掻き立てるものがいつのまにか大半を占めるようになっていた。

その企画ものとして今回の対象になったのが、「韓国女性の海外売春」というものであった。従軍慰安婦の問題も企画ものとして何度か組んできたが、扇情的な想像をそそのかす記事もややネタ切れの状態で、これ以上は読者も飽き飽きしていることが感じられた。そこで注目したのがこのテーマであった。ちょうど社会的な関心も高まり、日韓の政治的な懸案になりかかっていたので、タイミングとしてもよいということになった。読者の性的好奇心を誘う扇情的な側面も十分に担保できると編集部は判断した。それでひとまずその中心になっ

ている日本を取材することになり、場所はおのずと日暮里ということに決まった。日暮里にそうした女性たちが多くということは取材ですぐに分かった。この企画の取材に私が選ばれたのは、私が大学で日本語を副専攻にし、日本語が少しできるということからだったが、そのレベルが取材に耐えうるものでないということも分かっていた、日本語の通訳をつけてもよいということになった。それで以前の取材で知り合いになった清水という日本人に通訳をお願いした。

私が通訳の清水とバロンに入ったのは初日の取材が終わった夕方であった。初日の取材内容を整理し、翌日の取材計画と日程を調整するため、喫茶店を探したが、ちょうど金曜日ということで、二、三軒入った喫茶店はいずれもサラリーマンで満杯であった。仕方なく、軽く酒でも飲みながら打ち合わせをしようとして居酒屋に入ってみたが、どこもかしこも予約で満席になっていた。あぶれて街に追いやられた私たちの目に止まったのが、ほかでもなくスナックバロンであった。他に適当な場所もなく、まだ夜も早いので、それほどうるさくはないだろうと清水が誘ったので、好奇心半分と不安半分で中に入った。初日の取材は韓国人として気がめいるような内容も多く、私も少し酔いたいと思っていたので、清水の誘いが内心では嬉しかった。

甲高いあいさつで迎えられて店に入り、勧める奥のテーブル席を断り、入り口近くのカウンター席で清水と隣り合わせに座った。そしてさっそく取材の整理に取り掛かろうとした。日本語に対応する韓国語訳の確認と日本で使われる入管用語や法律用語、猥褻な風俗関連の専門用語の説明が主だったが、客のいないガランとした店に従業員が四、五人こちらの様子を怪訝そうにさぐっていたので、清水もさすがに言葉が憚れたようで、日本語で従業員と差支えない言葉を交わしながら、雰囲気落ち着くのを待っていた。なかなか本題に入れない状態であった。ちょうどそのとき、扉が勢いよく開かれた。そのとたん従業員がいっせいに、

「いらっしゃいませ」

と言った。あまりにも威勢のいい声で驚き、振り返ってみると一人の中年をやや過ぎて初老にさしかかった男が無然とした顔で入ってきた。青味の濃いジーンパンに英語が多く書かれたティーシャツの姿から若い人かと思ったが、白髪に覆われた髪は油で塗られて綺麗に後ろに回され、輪郭の強い顔はおそらく皺で覆われているようにも見え、全体的にどこか、不釣り合いの感じがあった。

「パク先生、こちらへどうぞ」

「今日もいらっしゃると思いましたよ。」

「キープのボトルでいいですよ。里美ちゃんもすぐ加わりますからね。ちょっとだけ待っていてくださいね」

三、四人の女性従業員たちが一気にパク先生という男を取り囲んだので、私は安堵した。これで好奇心の目から離れてようやく取材の整理ができると思ったからである。清水も安堵したのか、資料をテーブルに出して小声で説明を始めた。内容が内容なので、言葉をよく選んで周りを憚りながらひそひそ説明したり、従業員が席に加わってくるとまた話を中断したりした。私は清水の説明に集中しようと思ったが、どうも集中ができなかった。奥のテーブルから聞こえる声が気になって仕方がなかったからである。清水も同じ様子であった。奥のパク先生という人が大声でしゃべり、それに呼応して女性従業員たちが営業用の歓声をあげていたからである。しかし、気になるのは従業員の歓声ではなく、パク先生の話ぶりであった。パク先生が話す日本語がすこぶる気になったのである。パク先生が店の奥の隅に座って喋りだした瞬間からなにかがひっかかった。言葉がいわゆる標準日本語でなかった。といって訛りでもない。それは韓国人が話す癖の強い日本語で、その時初めて、女性従業員がパク先生と呼んでいる男が韓国人の朴先生を指しているのではないかと思った。さらにパク先生と女性従業員との会話で、その思いがほぼ確信的に変わった。

「パク先生は高貴な方なんですもの。日本で言うと武士よね。ううん、武士よりもっと偉い身分の方なのよ、ねえ、先生？」

ボトルを持って後から加わった里美という最前の女性が隣に座っていた若い女性従業員にそう説明し、パク先生の同意を求めた。

「それじゃ、殿様みたいなものなの？もしくは公家様とか？」

若い女性が里美へともパク先生へともなく聞いてきた。

「殿様に近いわよ、ねえ、パク先生？」

里美はパク先生の同意を求めた。それにパク先生は例の癖のある日本語で、一気にしゃべりだした。発音の癖は強かったが、日本語のスピードは意外に早かった。

「公家といってもピンからキリだし、それとも違うんだよね。まあ両班というものだけどね。武士は両班の家来みたいなものになるかな。両班ってわかる？」

「両班？分からないわ。そんなに偉いの？」

若い女性従業員の言葉にパク先生は機嫌を損ねたのか、すぐに答えた。

「私は両班だけど、それより自負を持っているのは、本貫が慶州ということだね。祖先はカクキョセ（赫居世）というの。赫居世はね、新羅の初代の王様な

んです。新羅って分かるよね。祖先がホオから生まれたので朴というの。こんなところで家自慢をしてもしょうがないけど、いちおう王族の後裔になるんだ。コウエイとは子孫ということ、つまり……」

パク先生は話を続けようとしたが、向かい側に黙って座っていた中年女性が突然口をはさんだ。

「先生はほんとうにホオから生まれたの？この前にも話を聞いたんだけど、まだよくわからないのよ」

突然の質問にパク先生は、「それはねえ」と言いながら、その由来を話し始めた。昔、新羅六村の村長らが徳のある王様を探し求めたこと、そんなある日、白い馬が嘶いているので近づいてみると、白い瓢の形をした大きい卵があったこと。それを割ってみると中から男が生まれ、それで皆が新羅の王様として推戴したという話を、癖のある日本語で饒舌に話した。

「つまり、瓢を朝鮮語でパク、漢字で朴と書くの。正確に言うとホオから生まれたのではなく、ホオの形をした卵から生まれたことになるかな。それが慶州朴氏の祖先ということ」

パク先生の話聞いて私は急に顔が火照ってきた。子供の時から数えきれないほど経験し、もう聞くのもウンザリするパターンの家柄自慢の話だったからである。みな祖先が両班だとか王族だとか、よく家柄自慢をして褒め合う。隣にいる韓国語の堪能な清水がそれを知らないはずがないと思ったので恥ずかしかった。先ほどの取材では劣悪な環境に身を置く特殊女性たちの話だったので、いちおう社会問題として距離を置くこともでき、それほど意識しなかったが、パク先生の言葉には内部の恥がさらけ出されているような感覚であった。清水もパク先生の正体を把握したのか、私の耳元に、

「いいんじゃないですか。ここにも両班と王孫の後裔がましまして。両班でないと韓国語を見たことがないからね。朴さん、昔さん、金さん、王さん、李さんなどがみな王孫だと言うし、そうなる韓国人口の半分以上が王孫になるよね。百パーセントは両班だしね」

と言って、私に向かってにんまり笑った。私の顔はいよいよ赤くなったが、それを気づかれまいと取材の話に戻した。韓国の事情に詳しい清水はパク先生に興味を示したのか、急に声を大きくして、時々日本語を交えた韓国語で説明し始めた。もう少し小声で話してほしかったが、清水は全く知らんぷりの顔であった。仕方なく、私は清水の説明に集中しようとしたが、耳はどうしてもパク先生の言葉に向けられ、そこから注意が離れなかった。

パク先生も韓国語で話しているこちらの様子に気づいたのか、急に両班と王孫の話はなくなり、平凡で下らない、しかも場所にもっとも相応しい卑猥な男女のやりとりが続いたので、私も安心して清水の説明に集中しようとした。当日の取材内容を大まかに整理し、日本語にあたる韓国語訳を話し合ったうえ、明日の取材予定に話が移ろうとしたとき、また気になる言葉が聞こえた。

「要するに、先生は日本に亡命したわけですよね？国を追われて？」

と若い女性の声がある。どうも若い女性は新しく店に入ったばかりのようで、パク先生についてはまだよく知らないようであった。

「そうよ。向こうで弾圧を受けて日本に一時亡命しているの。明治の志士みたいな方なのよ。先生、誰でしたっけ？あの明治の、先生がいつもおっしゃっている……」

里美はパク先生を見つめながら応援を頼もうとした。

「吉田松陰だよ、松下村塾の。志士はいつの時代にも理解されないものだから、弾圧を受けるものだね。つまり、虎は死んで皮を残す。私は日本人では吉田先生を一番尊敬している。弟子の伊藤博文は嫌いだけどね。伊藤は吉田先生を正当に継承していないと思うよ」

パク先生はわざとこちらが聞こえるような大声で話した。清水にもその声が聞こえたのか、一瞬パク先生の方を振り向いたが、またすぐ話題を続けた。私は清水の話題よりパク先生の言葉が気になってしょうがなかった。パク先生はまた続けた。

「そういう意味で、コウシュウの民主革命はまだ終わっていないね。反動独裁政権と親日資本主義によって民主の理念は汚され、革命の高貴な血はいまだに報われていないよ。悔しいが、いまは耐えるしかないね。里美ちゃん、あの曲頼むよ」

私は一瞬コウシュウの言葉の意味がよく分からなかったが、パク先生がカラオケを歌い始めたときに、コウシュウが光州であることが分かった。曲は、「ニム（あなた）のための行進曲」であった。曲のイントロが流れた時に、私は全身に電流が流れたような衝撃を受けた。もう三十年以上も聞いたことがない曲だったからである。遠い記憶の中の古傷が一気に裂けて血が噴出するような、激しい心の疼痛のようなものが全身を走った。日本のカラオケの中にこのような曲があることにも大きく驚いた。

「愛も名誉も名も残さずに、一生を貫こうという熱い誓い、同志の行方はいざ知らず、ここに旗だけが残り、……」

男はあたかも陶醉しているかのように、歌に夢中であつた。夢中というより夢中を装う自分に酔っているようにも見えた。私はあっけにとられた。清水も話題を中止し、しばらく男を見つめていた。私たちが注目しているのを意識したのか、パク先生はさらに声を上げて陶醉していった。

「われ先に進まん、生きた者よついで来い。われ先に進まん、生きた者よついで来い」

歌を歌い終えたパク先生は、ボトルの酒を一気にグラスに注ぎ、ビンは空になった。それを見た里美という女性が、

「先生、また同じチャミスルでいいのよね。また一本入れておくわ」と言った。

「いいよ、おれはチャミスル（正しい露）しか飲まないからね。安いこともあるけど。」

と言ったあと、大声の韓国語で突然、「穀は去れ。漢拏山から白頭山まで、土香りのする真心だけ残り、すべての金物は去れ」という意味の韓国語を叫んだ。有名な申某という詩人の言葉で、久しぶりに聞く言葉であつた。また心の裂け目から血が噴出するような気がした。清水がその韓国語詩の意味を理解したのかどうか、その表情からはうかがい知ることができなかった。内心では知らないでほしいと思った。まったく酔いが回らなかつたので、私はビールを追加で注文した。パク先生は酔いが激しくなつたのか、一段と饒舌になっていった。

「里美ちゃん、私は悔しいよ。光州で惨めに敗れて、でも頑張つたよ。空挺部隊の奴らが迫りくるなかで、私たちは一つになつてぶつかつていった。民主と自由を叫びながら。しかし、いまは愛も名誉も友も、なにもかもすべてを失つて……。」

パク先生がいかにも絶望的であるというような深いため息をついた。それに隣の若い女性が、

「でも今の韓国は立派な民主主義国家じゃないですか？」

「違うのよ、それが。先生の話聞いてみて」

里美という女性が、またなにかを言おうする若い子の言葉を遮りながら、パク先生のほうを見つめた。パク先生は私たちを一瞥したあと、

「あれはまったく偽物だね。偽物の民主だよ。その意味で光州の勝利ではなく、敗北だと言える。光州の勝利は変質し、いまは財閥や旧地主による独裁主義と反動親日資本主義によって巧妙に塗りかえられた。私が悔しいと思うのはこうした現実だよ。でも私はよく戦つたと自負している。あの無慈悲な反動勢

力の手先である空挺部隊に一步も譲らずに戦った。空挺部隊は同胞を同胞と思わぬ犬に成り下がったやつらさ。結局私たちは大きな犠牲を払った。一瞬勝利したが、それはすぐに変質したのさ。反動親日主義者と美国帝国主義に民衆が苦しめられている現実はなにも変わっていないよ」

パク先生の言葉に、里美は新人の若い女性に向かって、  
「それで先生は亡命したのよ。本物の志士なの。自由と民主のために戦い、いまは日本に一時逃れているの」

とパク先生を擁護した。里美の言葉にパク先生は気をよくしたのか、また大きなため息をついて見せたあと、里美にカラオケを頼んだ。今度はなにが出てくるのか、私も気をもみながら待っていた。イントロが流れ、歌詞が画面に出てきた。南北分断を歌った「臨津江」という曲であった。

「臨津江川の清き水、流れに流れて……」

激しい心の疼痛が悲しみともなり、また哀れともなって内部をかき乱した。古い過去の傷が赤裸々に現れ、押さえつけられた亡霊のような記憶がよみがえった。清水も私の様子を察したのか、静かにビールを飲んでいた。

それは私が大学一年の一九八〇年の春のことであった。三月に地方の国立大学に入学した私は、レンギョウと桜の花が咲き乱れている四月の校庭の中で、大勢の仲間とともにスクラムを組んで練り歩いていた。みなが仲間でみなが同志という強い連帯感に酔いしれていた。正義を実現する充実感が全身を満たしていた。横十人程度で組んだスクラムの列は何百メートルもつらなり、もだえる蛇のように、キャンパスの道路を回りくねっていた。

「打倒独裁、打倒独裁」

「民主万歳、民衆万歳」

私はほぼ先頭の列に加わり、「独裁政権打倒」「民主主義万歳」などと書かれた旗や太極旗を持って誘導する上級生の指示にしたがい、大学の正門や北門、東門のほうに向かいながら、警官隊とぶつかっていた。盾と防毒マスクで武装している警官隊の列に体当たりをし、警官隊を押しして突破を目指した。大人数の押ししてくるスクラムに警官隊は押され、いよいよ突破されようとすると、警官隊は近距離で手に隠し持っていた催涙弾を投げ込み、同時に後方からは催涙弾を激しく撃ち始める。そのたびに前列はあっけなく崩れ、また後方のグループも逃げ出し、混乱状態でいったん退却するのである。しばらく涙と鼻水をたらふくと流し、風上に向かって顔を乾かしたあと、列を再整備して今度は別の校門を目指してシュプレヒコールを連呼しながら勢いついていく。またぶつかり、

散々に涙と鼻水を垂れ流し、体液でまみれた汗臭い同志たちの肩にお互いに体重を預けながら、また別の校門を目指していた。それを何回も繰り返すと、四月の短い春の午後はあるという間に過ぎ、夕方近くなると校庭は催涙ガスと春の霽で白く霞んでくる。講義の多くは催涙ガスで休講になり、講義を期待した真面目な女子学生たちはハンカチを顔に当てながら足早に家路を急いでいた。そして陽が落ちる前にスクラムを解き、歩道ブロックを壊して警官隊の催涙弾が届かない遠距離で野球の遠投をするかのように、石を投げつけた。それに疲れてくるとちょうどキャンパスも暗くなりはじめ、三三五五に散らばり、なにもなかったかのように、警官隊の横を通り校門を出る。校門を出ると学科や仲間同士で、喫茶店や下宿先や自炊部屋などに集まり、時局討論会を行うのである。私はほぼ毎日こうした生活を繰り返していた。仲間と先輩たちにも恵まれていた。

三月の入学オリエンテーションが終わり、講義が二、三週続いて間もなく、私はすっかり講義に興味を失った。ソウルの名門私大の法学部を希望していた私は、経済的な理由で受験を諦めざるを得ず、高校の教師になることが運命づけられた地方国立大学の文学部に入学したことに強い不満をもっていた。しかし、実家は農家で、母親と小学校しか卒業していない兄が父代わりに、子牛やトウガラシを売って送金する状態だったので、家族に不満が言える立場ではなかった。それでも母には合格当初からぶつぶつと大学に通いたくないとか、やめてやるとか不満を言っていたが、早く亡くなった父の代わりに、小学校を卒業して農業を継ぎ、家族を支えている兄には一言の不満も言えなかった。兄は私を立派に国立大学まで通わせ、将来は教師という公務員として成功させることに大きな自負を持っていた。私は自分のそうした境遇がとても嫌だった。私より高校の成績も劣る何人かの友人はみなソウルの名門私大に通っていて、それに対する劣等感も心の片隅に強く残っていた。自分の貧しい農家という境遇と将来の運命が暗鬱になり、講義への興味も無くし、いつ退学になってもよいと思って文芸サークルに入った。期待されるとおりの教師には絶対になるまいと思っていた。

文学サークルに入ったのは三月のサークル勧誘のとき、文芸サークルの部員が学生運動で多くの逮捕者や退学者を出していることで同期生たちがみな敬遠したので、私はあえてそこを選択した。文学に興味があるわけではなかったが、勧誘の机の前に焼酎の一升瓶が何本も転がり、「文学は実践である」「文学は現実を反映する」「文学は抵抗精神である」という言葉が紙に乱雑に書かれ、机に垂

れ下がっていたので、その言葉にはなんとなく共感のようなものを感じた。サークルに入るやいなや、先輩から必読教養書目録を渡され、社会科学書が大半を占めるそれらの本を読むかわら、先輩たちと一緒に「出征」という言葉で呼ばれるデモ行進の先頭に立つようになった。学科の同期生には多少敬遠されたが、文芸サークルの強固な仲間が存在していて孤立感はなかった。

一年の四月末から学生運動がいよいよ激しくなり、五月になると催涙ガスでほとんどの授業が休講になった。何人かの教授が持論を述べながら頑固に講義を続けていたが、その時には不発した催涙弾の蓋をあけて、白い粉を教授の立つ演壇の下にこっそり撒いて強引に休講に追い込んだりした。運動に参加している学生たちもそれに興味のない学生たちもみな授業を聞くような心理状態ではなく、講義に価値を見出していなかった。催涙ガスで充満して霞んだ校庭に、桜はすでに散り終わり、花持ちの長いレンギョウも萎えはじめ、季節の早いツツジが咲き始めていた。

私は五月になっても毎日先輩たちと出征を繰り返した。催涙ガスにまみれながら何度となく校門の突破を試みた。しかしいずれも失敗し、警官隊に歩道ブロックのかけらを投げつけていた。私は遠投が得意で、その姿をできるだけゆっくり仲間に自慢して見せたり、コツを教えたり、場合には飛距離の競争をした。美しいフォームで投げた後の、飛ばされる石の放物線は綺麗だった。その美しさを見るとそれがなにに対する敵意なのか、自分にもよく分からなかった。自分の境遇に対する不満も一時忘れられた。そして仲間と時局懇談会を行い、しばしばそのまま仲間の下宿先に泊まったりして、朝はまた学校に向かい、校門突破を試みた。

そんな中、私たちは一度だけ校門突破に成功した。それが五月十七日であった。いつものようにスクラムを組んで校内を練り歩いたあと、校門突破に向かった。どうせ催涙ガスの乱射で失敗すると思ったが、その日の警官隊の抵抗は以前より激しくなかった。私たちはこれに乗じていっせいに突破を試みた。催涙ガスが飛んだが、警官隊の列も崩れ始め、私たちは勢いで校門の外に出た。警官隊が勢いに押されて道路の脇に撤退したので、通路が確保できたのである。歩道側に押された警官隊はそれ以上の妨害をしなかった。広い主要道路を開けて、それに分岐する幹線道路を防ぐ程度で、混乱を最小限にしているようにも見えた。あるいは一定の通路だけを開けてデモ隊を誘導するようにも見えた。私たちは喚声と歓呼を上げ、何十回も「ニムのための行進曲」を歌いながら、大学橋を抜け、市内の中心部の東城路まで進出した。左右の小道を防ぐ警官隊

の列は私たちをエスコートしているかのようであった。私たちは市民の拍手喝采のなか、東城路を通過し、中部警察署前を通り、道庁橋と道庁前を通過して大学の北門を抜け、校内まで無事に戻ることができた。私たちは初めて大きな勝利感に浸った。これは全面勝利と言ってよかった。あっけない勝利に多少は当惑したが、これで希望の新しい世界が開かれると思ひ、みなは喜んで抱き合い、お互いの労をねぎらった。みなは興奮状態で、私も興奮がしばらく覚めなかった。当日は、これはもしかしたら敵の罠かもしれないということで、大学の体育館を占拠し、集団籠城に入ることになった。拡声器からそのような内容のアナウンスが流され、私も顔見知りの先輩と一緒に参加した。

大勢の人間で体育館は暑苦しかったが、汗だくになり、みなは「民主民衆、民衆民主」「打倒独裁、打倒独裁」「民主万歳、民衆万歳」と、シュプレヒコールを叫び、何度も「ニムのための行進曲」を歌った。みな声がつぶれていて喊声は鈍く低かった。ときたま本部の情報担当から拡声器によるアナウンスがあった。

「同志のみなさん、緊急報告です。いま光州では戦闘が激しくなっています。鎮圧のために空挺部隊が出動し、犠牲者が増えています。光州で奮戦している同志のために私たちも応援し、頑張りましょう」

といった情報であった。これにみなは驚いた。光州でも私たちと似たような状況があると思っていたが、それがとんでもない状態になっていたのである。空挺部隊が鎮圧に乗り出し、市民と激しくぶつかり、ほぼ戦闘状態であるということだった。

「同志のみなさんに報告します。情報によりますと市民に犠牲者が出たようであります。空挺部隊によって多数の人間が殺害されている模様です。こちらにも敵がいつ浸透するか分からないので、まず体育館の警備と見張りを強化します。兵役を終えた二年以上の男子学生の中から志願者を募ります。志願を希望する同志は前にある本部までに出てください」

それに何十人かの男子学生が立ち上がり、前に出て行った。知り合いの先輩は光州の状態にやや怯えていた。私も不安になった。動揺した一部の女子学生が立ち上がり、静かに体育館を後にする光景が目撃された。それにつられ、男子学生もばらばらと立ち上がり、体育館をこっそり出て行った。十一時を過ぎた時には体育館の人数がだいぶ減っていた。ぎっしり詰まっていた体育館のあちらこちらに空いた空間が目立ち始めた。

「報告します。嬉しいニュースです。光州の雑居ビルに逃げ込んだ空挺隊員の

一匹を同志が追い詰め、ビルから突き落として殺しました。屋上に追い詰められた空挺隊員の一匹は、最後はひざまずき、命を乞ったそうです。恥知らずの者で、同志がそれを許さなかったそうです。光州の同志は命をかけて勇敢に戦っています。私たちも応援しましょう」

これには大きな拍手喝采が起こった。同時に「殺せ、殺せ」と言うシュプレヒコールが激しく起こった。それに続き、「ニムのための行進曲」を歌ったが、みな喉が潰れて声が出ない状態であった。私も大きく拍手し、行進曲を歌った。隣の先輩は度数の強いメガネを外して何度も涙を拭いていた。その後も次々と状況報告があった。

同志が犠牲になった報告、また嬉しい知らせとして空挺部隊の一人を撲殺したニュースが詳細に伝えられた。そのたびに拍手喝采が起こり、行進曲を囁いた声で激しく歌った。状況がたいへん切迫していることが伝わってきた。さすがに空挺隊員の殺害には不安になったが、喚声と行進曲でそれを紛らわせようと努めた。しかし一方では、こうした状況がどのようにして伝えられているのか、不思議であった。体育館の前には一台の公衆電話があったが、それで連絡を取り合っているようには思えなかったからである。その後も本部から市民の犠牲や空挺部隊の殺害の詳細な報告があった。体育館の人数はだいぶ減っていた。夜中二時を過ぎた時に、高学年生の志願者と執行部を除いては帰宅してよいというアナウンスがあった。精鋭たちが居残って見守り、他の人は帰宅して仮眠を取ったあと、夜が明けてからまた集まるようにという内容であった。

「李君はどうする？私はだいぶ疲れているので、いったん家に戻るけど」  
学科の一年上である先輩が聞いてきた。

「私もそうします。それじゃ、明日また会いましょう」

先輩と別れて体育館を出た。下宿先は歩いて十五分の距離であったが、街路灯の暗い路地を歩くときには身の毛もよだつような恐怖を覚えた。ひっそりと静まり返った下宿先の自分の部屋に戻ったとき、安堵とともに一日の疲れが一気に襲いかかってきた。強い緊張の糸が切れ、深い眠りに陥った。

目が覚めたのは翌日の十時を過ぎた頃であった。下宿先の朝食時間には間に合わず、近くの雑貨屋でパンを買ってほおばりながら大学に向かった。体育館に近い北門を目指して歩いていたが、人影は疎らであった。どうしたのかと意外に思いながら北門に近づいてみると、状況が一変していた。ヘルメットに白い布を巻いた兵士たちが小銃を持って北門の前に立っていた。後ろには迷彩色の装甲車が停まっていた。異変に内心驚いたが、あえて勇気を出して兵士の前

に近づいた。そして敵意がないことを示す形で、手をゆっくり上げながら、  
「入っては駄目ですか」

いかにも状況に驚いた表情を見せながら聞いたが、兵士は軽く首を横に振っただけで、私の問いには答えなかった。顎を引いて目を開いたまま微動だにしないかった。これは無理だと思い、いったん引き返し、道路に出ている商店街の人に事情を聞いてみると、

「今日から戒厳令が敷かれました。大学は閉鎖されましたよ。はやく家に帰ってください。」

と言って大げさに手を振り払うような仕草をしてみせた。致し方なく下宿先に戻ってみると、大家の女主人と私の隣の部屋の借りている教育学部の三年生の二人が話し合っていた。聞いてみると光州で事態が悪化し、戒厳令と大学閉鎖がすぐに解かれることはないということで、二人の三年生はしばらく実家に戻っていると語っていた。女主人は私にもいったん帰省したほうがよいと促した。私は躊躇ったが、下宿費を滞納していたので、滞在を続けるには、実家に戻り下宿料を用意してこなければならない状態であった。女主人が一時帰省を促しているのは、下宿滞納のことを暗に指摘しているように思われた。ひとまず下宿費を支払わなければならないと思い、いったん帰省することにした。

さっそく駅に向かい列車に乗った。実家は中部都市から一日四便運行する普通列車で三時間ほど乗車し、歩いて田舎道を一時間半ぐらい歩かなければならない距離であった。山に囲まれた村は李氏一族の集姓部落で、李氏以外に鄭氏、金氏がそれぞれ二軒ほどあるにすぎず、他の四〇数軒はほとんど一家親戚であった。

夜の九時を過ぎたプラットフォームには、五、六人しか下りなかった。植民地期に建てられた瀟洒な日本風の駅舎を出ると、一緒に下りた乗客はいつのまにかそそくさと消え、一人で夜道を歩いた。駅前の疎らな人家を通るとまもなく田圃道になり、さらに山道が続く。街路灯一つもない暗い田圃道を独りで歩くと前方には一本の土の道がほの白く見えるだけで、周りは暗闇である。空の低いところで山並みの稜線が一本の線となつてうっすらと見える。私は果てしなくつづくほの白い一本の白線を頼りに、なにがあってもそこからは外れまいと注意しながら、闇の中を歩いた。田圃道を出ると山道が始まり、遠くからオオカミの鳴き声が聞こえた。中学校を卒業して中部都市に下宿して以来、何度も歩いた夜道で、オオカミの鳴き声にはいつも体が縮こまるような恐怖を感じていたが、なぜか不思議なほど怖いとは思わなかった。しばらく山道を歩くと、

前方の山裾にぼんやりと一つの小屋が見えてくる。

小屋は鄭氏の同族部落のはずれにあるもので、そこには葬式道具が納められていた。葬式に担ぐ大神輿や小神輿と派手でけばけばしい葬式用の飾り花などが納められている小屋だった。小屋の横を通りすぎる時には、昨日聞いた死者たちが魑魅魍魎となって後ろから襲いかかってくるようで、急に身の毛が立つ。カーブを曲がりきるとぼつぼつと鄭氏一族の村の灯りがいくつか見えはじめたので、ようやく不安から解消された。もう実家はすぐそこにある。

家に着くと寝ていた兄と母がすぐに起き上がり、私の帰省に驚き、また喜んでくれた。母は、

「よかった、よかった。無事に帰ってきてくれて本当に良かった」

と手をしばらく握りしめたあと、さっそく夕飯の用意にとりかかった。内耳炎の治療が遅れて難聴ぎみになり、口数の少ない兄はなにも言わず、にこにこ一人で恥ずかしそうに笑っていた。いつものように、私にはめったに口を利かない。笑って私の話を聞いて、短く農作物の作柄を簡単に話すだけであった。私はシュプレヒコールで喉をつぶしていたので上手にしゃべれなかった。

「今年はトウガラシ畑に雑草が多いんだよ」

兄は心配そうに一言を言い残したあと、自分の部屋に戻った。

翌日、母と兄と一緒にトウガラシ畑で一日中、三人並んで地べたにへばりつき、雑草を抜いた。光沢のある小さいトウガラシの苗はびっしりと茂った雑草にまみれ、抜いても抜いても、広い畑の雑草は減る気配がなかった。果てしなく続く重労働で、このような前近代的な農業で、ただただ地べたにへばりついている母と兄の無知がかわいそうにもなったが、それが結局は私の学費に消えていたので、それについてはなにも言えなかった。その代わり、大学で起こっていることを話した。私のしゃがれた声で、母は私が学生デモに出ていると思って心配し、しきりにデモなどには参加しないように、何度も何度も繰り返していた。隣で私の話を聞いていた兄はなにも言わない。黙々と素早く手を動かして雑草を抜いていき、母と私をだいぶ引き離していた。私はわざと兄に聞こえるように、母にしきりに民主主義とか自由とか農民解放とかについて話した。どんどん先に進み、後ろ姿しか見えない兄の表情はうかがえない。母は遅れがちな私を助けて私の前にある雑草をむしり取りながら、とにかくやめなさいと繰り返していた。

夕方になって畑仕事が一段落したとき、兄には聞こえないように、母に短く告げた。

「明日、大学に戻る。お金を用意してくれ」

「やめなさい。あぶないんだから。いちおう兄ちゃんには相談してみるけど、それだけは絶対にやめたほうがいいよ」

母は哀願するような顔になった。深い皺が夕日を浴びて一層目立って見えた。

「明日、大学に戻る」

と母に短く告げたあと、私は先に家に戻った。周囲が暗くなって母と兄が帰ってきた。離れの外から兄の足音がしたので、気になり、部屋の中で兄の気配に注意を払っていた。兄は除草作業のあと、急いで刈り取った牛のエサ用の雑草が入った大きな籠を担いで、それを納屋に運んでいた。私は緊張した。途端に、エサ用の雑草が入った大きな籠を地面に力いっぱい叩き付けるような激しい音がした。それに続いて、

「いったいなにしているんだ！ どうするつもりなんだよ！ わけのわからない話ばかりで、いったいどうするつもりなんだよ！」

私に聞こえるように大声で兄が怒鳴っていた。生まれて初めて兄に怒られた。あんなに怒る兄は見たことがなかった。いつも私の言うとおりにしてくれた兄で、学費のことは一言も言わず、いつもふんだんに用意してくれた。私は兄の言葉が聞こえなかったかのように、部屋の中で息を殺し、ひっそりとしていた。しばらくしてから、母が様子を見にきた。私は母に、

「もう大学に戻らなくていいよ」

と、簡単に告げた。兄にはとても逆らえなかった。私の革命はこれで終わったと思った。遅い夕飯の時には家族と一言も言葉を交わさなかった。

その夏と秋の十月まで私はトウガラシや大豆や胡麻畑の雑草ばかり抜いていた。光州での動きは複雑になって収拾し、涼しい秋になった時には戒厳令と大学閉鎖が解かれ、私は大学に戻った。少し講義を聞いてみたいと思った。文芸サークルへの出入りは控えた。

突然にスナックの中でカラオケの音が激しくなり、私は遠い記憶から戻った。パク先生が「ヴォルガは流れる」と「マイ・ウェイ」を歌い、里美が演歌の「川の流れのように」を歌い、それに倣って若い子と向かい側の中年女性が現代曲を軽快なリズムで勢いよく歌った。それにつられたのか、パク先生も席から立ち上がって若い女性アイドルグループの曲と思われるカタカナの多い曲を歌い出し、女性従業員たちがそれに合唱した。にぎやかな雰囲気になってきた。清水は一人でビールをチビチビと舐めながら明日の打ち合わせのメモを確認していた。カラオケの歌が一段落するとパク先生はまた光州の話を繰り返した。自

分がいかに勇敢に戦ったのか、自由と民主主義をいかに愛しているのか、私たちに聞こえるようにわざと大きな声でしゃべり続けた。そしてまたいかにも絶望的であるかのように、大きなため息をつく。そのたびに、里美という女性が、「パク先生、絶対に負けては駄目ですよ。また頑張らないといけませんよ。私は先生を応援してますからね」

と慰めた。

私はこの異様な光景に自分が違う時間軸に入り込んだような違和感とともに、悲しみとも哀れとも言えない複雑な気持ちになった。しかし、妙なことにパク先生の素性については不思議なほど興味が起こらなかった。パク先生の話が本当なのかどうかはどうでもよいと思った。はたしてパク先生がその時に光州にいたのかどうか、はなはだ疑わしかったが、それを詮索したいとは思わなかった。異様な時間軸が内面に入り込み、目の前の光景が現実のものでないような感覚になってきた。

大学に戻った私は普通に授業を重ね、二年生の時に徴兵され、大学生だったということで高卒の古参兵にしこたま殴られ、復学して無事に大学を卒業し、今の女性雑誌社の記者になった。教師になってほしいという兄と母の懇願には最後まで従わなかった。そして普通に結婚し、子供をもうけ、きわどい扇情的な記事を書きながら職に必死にしがみついてきた。大学一年生の春のことは忘れようと努め、記憶の中で固く封印した。

光州の事件はその後、光州民主化抗争ということになり、国家の記念日になり、当時の犠牲者たちは民主化の英霊となった。烈士という称号で手厚く国立墓地に葬られて恩給が出るようになり、生存者は民主化闘士ということで崇拜されるようになった。教科書も書き替えられた。そうした時代の流れの中で、私は光州については語らなかった。その話題を避けて、社会運動と女性解放を口実にした女性関連のきわどい扇情的な記事を書いてきた。自分が社会や女性のために働いているという意識は微塵もなかった。光州の話題が出るたびに記憶の傷痕が裂け、その疼痛がうずいた。どういうわけか、光州の記憶が呼び覚まされるたびに、異様な光景が記憶に鮮明に刻印され、記憶はその一点に集中する。

追い詰められた空挺隊員が雑居ビルの屋上で命を懇願する。怒りに満ちた大衆は徐々に接近する。空挺隊員の若い兵士の手に武器はすでになく、両手を合わせて「生かしてください。生かしてください」と涙目で哀願する。同志を亡くした怒りに燃える群衆は、徐々に距離を詰める。兵士の顔色は絶望的に変わ

る。群衆は兵士を雑居ビルの屋上から突き落とす。兵士は悲鳴を上げながら一直線に落下する。落下する果てしない悲鳴の音が聞こえる。

さらに群衆に包囲されて孤立した空挺隊員が、震えながら両手を上げている。群衆はそれに向かって鉄パイプとこん棒と石で殴打する。倒れた兵士の体の上には夥しい雨嵐のように鉄パイプとこん棒と石が降り注ぐ。その光景が眼前に鮮明に浮かび上がり、それに拍手喝采を送り、「殺せ、殺せ」というシュプレヒコールを叫び、行進曲を歌う自分の姿がオーバーラップされる。冷や汗が背筋に流れ、悪夢のような記憶にうなされ、しばらく杳然として動けない。私は何度もこの悪夢に苛まれながら、そのたびに、奥深くその亡霊を閉じ込めてきた。記憶を抹殺しようとした。歴史は全く信じなくなった。美化されたストーリーの背後にある醜悪な部分が先に見えてしまい、素直にはなにもかも信じられなくなった。偽善を装いながら扇情的な女性関連記事を書いている自分の現在を軽蔑しながら、歴史を軽蔑し、善悪も正邪も軽蔑して信じなかった。ただ無機質な時間だけが空虚に流れる。私の人生はそれでよいと思っていた。

隣に座っている清水がもうそろそろ帰ろうというサインを送ってきた。私は頷き、清水がカウンターで無表情に立っているマダムらしい中年女性に目で合図を送った。中年女性から伝票を受け取る時に、清水は首を軽くパク先生のほうに回して見せた。誰？というような仕草であった。それに中年女性は別段興味もなさそうに、

「よく来てくれるけれど、それがまたよくわからないのよ。どうも韓国人らしいけど、仕事も住所も本名もよく分からないわ。いつも同じ話ばかりで、いったいどういう人間なのかさっぱり分からないわ。まあ、それほど興味もないけどね」

と切り捨てるように言った。

私たちが店を出る気配を感じたのか、明らかにこちらに聞こえるような大声でパク先生が言った。

「里美ちゃん、私のために例のいつもの曲を歌ってくれない。里美ちゃんの歌を聞いているとなんとなく落ち着くから」

またカラオケが始まるかと思ったが、意外にも生の地声が聞こえた。歌の一声が始まったとき、背筋が寒気で凍りつくような戦慄を覚えた。日本人特有の舌足らずの韓国語発音の歌が背後から突き刺さるように聞こえたのである。舌足らずの韓国語の発音のせい、里見ちゃんの歌声は清く透明であった。童謡「故郷の春」であった。

「ナエサルドンコヒャンオン、コッピノンサンコル、ポッスンアコッ、サルグコッ、アギジンダルレ（我が住んでいた故郷は、花咲く山里、桃の花、杏子の花、小ツツジ）」

私は背中が凍りついて一瞬動けなかった。里美ちゃんの歌声は続いた。

「色とりどりの花で宮殿のように飾られた村、そこで暮らした時が懐かしいです」

清水は勘定を済ましてすでに入口に向かっていった。私は努めて後ろを振り向かず、呆然となって扉のほうへ向かった。店を出ると冷たい夜風が吹いてきたが、顔の火照りと背中冷えは容易に収まらなかった。同時にパク先生には無限の軽蔑と無限の同情の気持ちが湧いてきた。愚かな哀れみと形容しようもない悲しみが激しく心をうち始めた。パク先生の話が虚言と誇張で固められたものであるとしても、また彼が異国で恥さらしの滑稽を演じる詐欺師まがいの人間であるとしても、彼が私の同族であることは間違いなかった。自分の中にもっとも軽蔑する部分を彼が持ち、自分の中にもっとも柔らかい傷を彼も共有していたのである。とてもやりきれない思いがした。自己と歴史と多くの人たちの運命に急に涙が出そうになったが、隣に清水がいたので、必死でこらえた。

路地を出て清水と別れた。清水は日暮里駅に向かうと言って、明日の約束時間をもう一度確認して駅に向かった。私は近くのホテルに向かった。ホテルに向かう途中、東京の空を見上げると、どんよりした曇り空はいまにも雨が降りそうであった。曇った空のせいなのか、無数の電燈とネオンが一段と鮮やかに見えた。

（完）